

2026.4.9 (木)
第 38 回例会
(通算3847回)

2025-2026 年度 釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン「笑顔と誇りを胸に、挑戦するロータリー」

会 長 荒井 剛
副 会 長 池田 一己
幹 事 横田 英喜
編集責任者 クラブ会報・雑誌・公共イメージ委員会

例会日 毎週木曜日 12:30 ~ 13:30 夜間例会 18:00
例会場 釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局 釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F
☎ 0154-24-0860 📠 0154-24-0411

2025-2026 年度
国際ロータリーテーマ

『よいことのために手を取りあおう』
UNITE FOR GOOD

2025-2026 年度
RI 会長 フランチェスコ・アレツツォ
第 2500 地区ガバナー
佐渡 正幸 (釧路北 RC)

本日のプログラム 講師例会「こどもも大人も自分を実感できる地域に」(プログラム委員会)

次週例会 IM・クラブリーダーシップラーニングセミナーに参加して(理事会・次年度理事会)

- ロータリーソング：四つのテスト ■ソングリーダー：堀 充利君
- 会員数 104 名
- ビジター
- ゲスト 釧路町教育委員会社会教育主事 貴志 淳一様

会長の時間 荒井 剛会長



皆さま、こんにちは。昨日、今日と入学式シーズンでした。私は別保という所に住んでいるのですが、昨日は、うちの子どもは小学校

を卒業しているのですが地域の見守りということで、いまだに別保小学校の入学式に参加したりします。

今日は、釧路ロータリークラブが支援しているインターアクトクラブがある武修館高校の入学式に行ってみました。

入学式に関わる話をしようと思っていたのですが、ネタがないので、話しているとだんだん難しくなるかもしれませんが映画の話をしてみたいと思います。

いろいろなロータリークラブの会報を見ると、ロータリーと映画という話で見ると、みなさんが知っている映画の中でロータリーが使われてという、ロータリーのロゴだったり、例会場が使われていたり、という映画があります。有名なところでは『ボディガード』、ウィットニーヒューストンが最後に歌って、ケビンコスナーが助けるという最後のシーンがロータリーの例会場なのです。ロータリーマークの旗があって、実在するロータリークラブではないみたいですが、思いっきりロータリーの例会場が最後のシーンになっています。あとは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』。ちょっとしたシーンですが、30年くらい前に戻りますよね。

1985年から30年くらい前に戻った時の街並みを写すシーンがあります。その街の入り口に世界三大奉仕クラブと言われているロータリークラブ、ライオンズクラブ、それからかなり前の会長あいさつで触れたキワニスクラブの3つのロゴが使われています。

このようにロータリーのロゴが映画の中で使われていることが、いろいろなロータリークラブの会長あいさつなどで触られています。それはそれで終わってしまうので、全くつながりはありませんが、もうひとつ、映画の紹介をしたいと思います。最終的には弁護士なので弁護士に関わる話にも触れることとなります。

映画のタイトルは『ダブル・ジョパディー』です。「B O S S」のコマーシャルに出ているトミー・リー・ジョーンズが警察官役で出ていた1999年ころの映画なのです。

概要を言うと、夫殺しの疑い(実際はやっていないのですよ)で裁判にかけられて、有罪になってしまって、実際に10年か20年くらい服役をするのです。服役した後に出てくるのです。出てきたら、実は夫は生きていたのです。夫にハメられていたのです。夫は死んだことにして違う名前で生きていたという話があります。

このタイトルに関わってくるのですが、ダブル・ジョパディーのダブルは「2」という意味です。ジョパディーは「危険」という意味です。二重の危険という意味ですが、これをアメリカの憲法でも、日本の憲法でも明記されている「二重処罰の危険」という意味が

あります。

二重処罰の危険というのは、みな、同一の犯罪については重ねて責任を問われないという法律なのです。これをこの映画に当てはめてみると、どうでしょう。

奥さんは、夫を殺した罪で裁かれています。そして有罪になっています。服役もしています。そうすると、実際には生きていた夫をこれから殺しに行くというのが、このテーマなのです。その夫を殺したときに、夫殺しの罪で裁かれるのですか、と。既に夫殺しの罪で一度裁かれていますから、二重処罰の危険という大原則からすると裁かれないよね、というのが憲法の大原則にあって、それをテーマにした映画なのです。

とても面白いのですが、私はこう見えても弁護士ですから、ホントか、ホントにそんなことあるのかと思って考えてみると、違うはずだなと。なぜ違うのかというと、これは冤罪なのです。そもそも殺していないのですけれども、犯罪として成立して、刑務所に服役しました。これは、実際にはどうなるのかと考えると、まず、夫が生きていたと分かった時点で、夫を殺していない、夫は死んでいないのだから冤罪です。すると、再審請求されて、たぶん無罪になります。最初の夫殺しの罪が「被害者がいない」ということで無罪になって、有罪が取り消されます。

そうすると、服役した後に改めて夫を殺した場合には、夫を殺した罪で裁かれることになるので、結論としては面白いテーマではあるのですが、そんなことにはならないという話です。

たぶん、私の結論は合っていると思うのですが、一応、A Iに聞いてみました。すると、「あなたが思っている結論が正しいと思います」と言っていましたので、そうなんだと、間違いはないと思います。例えば、死んでいるから分からないのですが、未遂だと考えると分かると思います。男の人でも、女の人でもいいのですが、ご主人が奥さんの首を絞めて殺しかけたので殺人未遂罪でつかまり、裁かれました。「これから仲良くします」と言って1年経った後で、今度はナイフでご主人が奥さんを刺し殺そうとしました。「同じ奥さんに対する殺人未遂罪ですけど、同一の犯罪として裁かれないのですか」と言ったら、「そもそも同一ではない」ということで二度裁かれることになります。

さっきの事件でも、同一の犯罪と言いつつ、日時も違うので別々の事件として裁かれるとなります。

なんの話になるか分かりませんでしたけれども、映画の話を紹介させていただきかけたので、ダブル・ジョパディーにご興味があれば観ていただければと思います。

本日の会長あいさつはこれで終わります。以上です。

幹事報告 横田 英喜幹事

先週のIMの翌日、4月5日日曜日に、2500地区第7分区の事業として「飲酒運転撲滅および交通事故防止のキャンペーン」に荒井会長と幹事の私が参加してきましたので報告します。

続いて、ロータリー文庫運営委員会から連絡がありました。「文庫通信」の397号が来ております。QRコードとIDとパスワードが必要になりますのでホワイトボードに張ってお知らせします。ロータリー文庫って、みなさん分かりますか。ロータリーの資料館のようなものですので、調べたいものがあると、そこから見るといろいろな物が載っております。

最後です。これも先週メールでお知らせしました「グローバル補助金の贈呈式」を5月18日にタイで行われます。参加ご希望の方は、幹事まで報告をいただきたいと思います。

海外ですけれども、現地集合・現地解散となっておりますので、参加される方には詳しい日程をお知らせいたしますのでよろしくお願いいたします。

以上です。

八幡 好洋次年度幹事

次年度幹事予定者の八幡です。今週末、4月12日日曜日に「CLLS:クラブ・リーダーシップ・ラーニング・セミナー」が開催されます。その前日に釧路ナイトとして18時より「焼鳥倶楽部ふとっばらや」で開催いたします。ホテルに宿泊される方は17時45分にホテルロビーに集合とさせていただきます。各自手配の皆さまには現地集合でお願いします。その後、20時から2次会を開催します。

翌日、12日は8時45分に会場のホテル「OMO7」集合して、9時に集合写真を撮らせていただきます。そして9時半から本会議、午後に分科会という流れになっておりますので、参加される皆さんは安全にご移動をお願いいたします。

よろしくお願いいたします。

■本日のプログラム■

講師例会「こどもも大人も自分を実感できる地域に」

プログラム委員会 藤井 敬亮委員長

みなさん、こんにちは。本日は、釧路町教育委員会社会教育主事の貴志淳一さんより『こどもも大人も自分を実感できる地域に』という演題で発表していただきます。

貴志さんは、実践的に地域と子どもたちと、企業と子



どもたち、という活動をされております。とてもバラエティ豊かな経験を子どもたちにさせて、とても笑顔が絶えない活動をいつも企画されている方でございます。

先生の発表をご覧になって、皆さまにもできることを考えていただければ幸いです。それでは、よろしく願いいたします。

ご講演

釧路町教育委員会 社会教育主事・貴志 淳一様



皆さん、こんにちは。高い席から大変失礼いたします。今回このような機会を頂戴いたしまして本当に光栄でございます。どうもありがと

うございます。

今回、濱口さん、藤井さん、荒井会長、そして皆さま方も、今回のタイトル『こどもも大人も自分を実感できる地域に』ということで日頃から高いレベルで実践されている皆さまの前で大変僣越ではございますが、私の日々の感想が中心となりますけれども、お聞きいただければと思います。

私、釧路町教育委員会の貴志と申します。日頃、3つの役割を担わせていただいております。今日は社会教育主事という立場で伺わせていただきました。社会教育主事は教育委員会の中で専門的教育職員として2職種がおりまして、学校教育の指導主事と社会教育の社会教育主事ということで2つの職種があって、私は社会教育主事をしております。どんな仕事をしているかということ、多岐にわたるのですが、一言で言うと「人と人をつなげる役割」をしております。あとは「人とロマンをつなげる仕事」ということを自分の胸に刻んで仕事をしております。その他、社会教育課長も務めております。もうひとつは、釧路町こども会の事務局長も務めております。

私がやっている社会教育課長の仕事の中で一番力を注いでいるのは、中学校の部活動の地域展開です。皆さまの地区でも、このような準備を整われていると思いますが、中学生のスポーツ文化活動を学校教育の中で行っていたものから社会教育の中で行おうとするもので、これがなかなか大変なのです。当町では、今年の4月から女子バスケットボールとサッカーをこの地域クラブを発足して活動を進めております。

『全国体力運動能力運動習慣等調査』で、小学校5年生と中学校2年生で8種目の体力テストを行います。50メートル走、シャトルラン、握力などを行います。全国と平均して当町は平均値では小学生はまあまあなのです。でも、中学生になると一気に全国と差が開き

ます。中学生なので、ちょっとだるいみたいなどころはあるのかなと思いますけども。この体力テストは25年前から始まりました。学校の体育館に今までの歴代の記録で握力が何キロ、50メートルが何秒と貼ってあります。それを見ると、25年前に始まっていて、記録は年々塗り替えられてどんどん良い記録に伸びているのです。ただ、平均は落ちていることとなります。ここから見えることは体力の二極化があります。体力が伸びている子は伸びている、そうではない子もたくさんいるのです。このような体力テストに挑戦しようとか、乗り越えようというマインドの二極化かもしれません。

本日、このような貴重な機会を頂戴して共有させていただきたいことは、この教育行政において日々感じているのがこの二極化です。私は研究者でもありませんし、根拠もありません。ただの役場職員ですので、講演でというのはいささか恐縮ではございますが、本日はどうぞよろしく願いいたします。

最初に、「少年の主張 釧路町大会」が昨年12月23日に行われました。その発表の中で、写真にある昆布森中学校1年生の女子生徒の発表を皆さんにぜひ聞いていただきたいのです。これからこの女子生徒が読んだ原文のまま読みますのでお聞きください。

過去と未来

もし、あなたが過去か未来に行けるとしたら、どちらに行きたいですか。私は過去に行きたいです。具体的には、スマホのない時代に行きたいです。スマホのない時代に行って、外で遊んだり、公園がどんな様子だったかを見てみたいと思います。

ある調査では、現代の子どもが外で遊ばなくなっていることがわかっています。なぜなら、スマホやゲームなど、室内での楽しみ方が充実しているからです。動画配信サイトやSNSを使っていると、あっという間に時間が経っていますし、オンラインゲームの種類も豊富で、1日1回はログインしないと損をするようになっています。そして、スマホもゲームも、室内にいながら多くの人とつながることができてしまいます。ですから、外に出て行く必要性が薄れてしまうわけです。

次に、外遊びについての問題点を挙げてみます。まず、公園で遊ぶ子どもたちの声がうるさいと、大人からクレームが入る事例があります。そのようなクレームを入れる大人たちは、自分が子どもだったころ、公園でどのように遊んでいたのでしょうか。確かに、行き過ぎた大声や、騒いでも良い時間帯など、最低限守るべきマナーやルールはあると思います。けれど、遊んでいるうちに、にぎやかになっていくのが子どもたちであり、外遊びの自然な姿ではないでしょうか。ほかにはケガをしそうな遊具が撤去されたり、老朽化

した遊具が撤去されたり、ボールなどの使用が制限されたりしている現実があります。ケガをしそうな遊具について、骨折や命にかかわるような重大な事故を引き起こすような場合を除き、撤去する必要がないと私は思います。なぜなら、ケガをする経験を積んでいくことが、子どもには重要な学習になると思うからです。老朽化した遊具についても、修理や補強という選択肢もあるはずですが、お金のかかることなので、難しい実態もあるかもしれませんが、簡単に撤去しないで欲しいと思います。

子どもたちの遊ぶ声に対するクレーム。遊具の減少。使える道具の制限。「最近の子どもは外で遊ばなくなったね」と大人は言いますが、その原因は果たして子どもの側にあるのでしょうか。もっと言うと、スマホやゲームを開発して、それらを子どもたちに積極的に使わせて、まるで中毒みたいにさせているのは、子どもに責任があるのでしょうか。

私の住む昆布森地区には、小さいながら公園があり、通りかかると、小学生たちが遊んでいるのを見かけます。それを見ると、私は安心して、うれしい気分になり、ときどき一緒に遊びます。

スマホのなかった昔、子どもたちは外で遊んで、体力をつけて、免疫力を高めていたのでしょうか。そして、年齢の異なる子ども同士の交流によって、社会性を学ぶこともできたのでしょうか。体も心も、両方とも健康に育つ環境があった時代がうらやましいです。

私はスマホを全否定するつもりはありません。使い方によってはとても便利ですし、おそらくスマホなしでは成り立たない世の中になっています。

もし、過去へ行って戻ることができるのなら、私はその時代の人たちが、どんな外遊びや交流をしていたのか、この目で見てみたいです。そして、そこで見つけたものや気づいたものを、どうにか今の世の中に生かすことができなにかを考えてみたいです。そうすることで、明るい未来をつくることができたらいい、と私は考えています。

という昆布森中学校1年生の女子生徒の発表です。この発表を聞いてみていかがでしょうか。

中学生ながら、今おかれている環境を痛烈に批判しております。こういった批判的な思考は単に批判するだけではなく、現状を整理し、自分がなすべき行動が分析できていることから非常に力強い発表でありました。ただ、2年生と1年生が発表しますので、この子は1年生でしたので2年生の子にはまだまだ勝てないところもあって最優秀賞にはなりませんでしたが、非常に将来が豊かだなど思っております。

この女子生徒の問題意識の中で、私が読んで中で一番感じたところは、スマホのなかった昔、子どもたちは外で遊んで体力をつけて、免疫力を高めていたの

でしょう。そして、年齢の異なる子ども同士の交流によって、社会性を学ぶこともできたのでしょうか。体も心も、両方とも健康に育つ環境があった時代がうらやましいです。と、僕はここだなと感じております。

スマホやゲームといったインターネットを通じた交流であれば、どこにいても成長は同じで、同時に僕としてはフワフワした印象です。自分が暮らしている土地で、自分の足で立って、体全体で地域を感じるのではない、という印象を受けます。

そして、なんなら北海道でなくても、釧路でなくてもいいし、釧路に愛着も生まれなという感じでございます。学校と家を往復して、部活に出て、帰ってゲームして、スマホの動画を見て、この釧路で育っている実感がないのかなと感じております。

僕が「釧路の良いところは何か」と聞くと、子どもたちはだいたい「自然」とか「人の良さ」と答えます。当町の出身で今、26歳ぐらいの女性がいます。その子が関東圏の国公立の大学に行っていて、大学3年生の時、こちらに帰省する時に僕のところに寄ってくれたのです。地域振興に関する研究をしていて、地方出身の学生同士で、地元の話をついばいするそうです。みんなの地域の良いところをそれぞれが紹介し合っていて、自分も「釧路湿原がすごいんだ」とか「タンチョウという大きな鳥がいるんだ」という話をするらしいのです。みんなは、自分の地域のすごいところが『何がすごいのか』をしっかりと伝えることができている。でも、その女の子は「すごいことは伝えられるのだけど、何がすごいことを伝えられなかった。釧路にいる時にもっと深く勉強すればよかった」という話をしていました。

また、僕が小学生に時々「何が好きなの」と聞くことがあります。すると、子どもたちには「ない」とか「分からない」と言う子が結構多くいます。もちろん、自分がやっているスポーツとか習い事とか、あとは素直に「お菓子食べること」とか「寝ること」と答える子もいます。でも、分からない、ない、と答える子が結構いるのです。でも本当は、ゲームだったりYouTubeだったりしているのです。その子たちは。僕のような教育委員会のおじさんには言えない、そんな後ろめたさがある。そして、好きなことを見つけられている友達に劣等感を感じている子どももたくさん見えました。

教育行政に務めていく中で、先ほどの中学生の体力の二極化と同時にある二項対立が僕には見えてきました。釧路の良さを伝えられていると感じている僕のような大人。釧路の良さを知っているふりをして子ども時代をやり過ごしている子ども。自分の好きなこと得意なことを見つけられている子ども。自分の好きなこと得意なことをまだ見つけられていなくて、見つけることなく都会に行くことだけを目的に釧路を離れる若

者。このような状態で、この釧路で成長して自分は間違えないと自信を持てるのでしょうか。そんなフワフワした状態で、他の地域で学び成長してきた若者たちと渡り合えるのでしょうか。僕はここが一番感じているところです。

これを何とかしたい、そういう思いをしたい、と思わせないように釧路町教育委員会では取り組んでおります。

実際に取り組んでいるのは、写真のような取り組みです。なるべく些細な体験、気軽に参加できる体験を心がけています。なるべくお金をかけずにいろんな人に関わってもらって、助けてもらって、場所や道具をお借りしながらやっています。参加する子どもは、普段着ているジャージと運動靴で来て、お弁当とおやつを持って参加できるように心がけています。

この活動の中で一番好きな時間帯は、お弁当の時間です。目いっぱい外で遊んで、みんなでお弁当を広げると、おうちの人を作ってくれたお弁当を夢中になって食べます。「美味しいかい」と聞くと、みんなはお弁当の中身を自慢してくれます。「このおかずが好きで、今回も入れてもらってうれしい」とか、「昨日おうちの人と一緒にデザートフルーツを選びに行ったんだ」と、おうちで親子の絆のことも話してくれます。おうちの人に支えられて参加できている。この地域にはこんな場所があり、こんなことができ、こんな大人がいて、そして自分の学校やクラス以外にも子どもがいて、仲良くなれそうな町の仲間がいる、ということに気付くことができます。そして、「当たり前じゃないよ」ということも同時に伝えます。

なるべくお金をかけないのには、もうひとつ理由があります。参加のハードルを上げないことはもちろんですけれども、もうひとつ理由があって、お金をかけると大人が学ばずにお金で解決しようとしてします。

このことは先ほど紹介した昆布森中学校の女子生徒が指摘していたように、スマホやゲームを買い与えて子どもだけでやらせてしまうのと同じで、大人の都合で作った仕組みやルールの中で子どもの遊びをコントロールしてしまう原理となります。ですので、お金をかけずに地域の大人たちと知恵を絞って、子どもが自分の「好き」や「得意」を見つけれられる環境を用意することに徹しています。

そして、このような体験学習を進める中で一番学ぶのは私のような大人です。僕は、ただただ役場職員でした。ですが、12年前に教育委員会に来て、子どもたちと一緒に学んでいくことで大きく成長ができました。このような活動は自分のためにもこれからも続けたいと思います。

だけど、1回のこの活動で僕が子どもたちにこの体験をさせてあげられるのは、せいぜい30人から40人ぐらいなのです。釧路町には小学校1年生から中学校

3年生まで大体1200人います。そして釧路市を含めて釧路管内には、もっとたくさんの子どものいます。いろんな地域の大人に関わっていただいて、さまざまな機会に街の先生となって皆さんに会っていただいて、子どもたちの教育に関わっていただきたい、携わっていただきたい。皆さまの身近なところでもできることがたくさんあります。

例えば、地域の学校のコミュニティスクールに参加するとか、職業体験を受け入れてくださるとか、夏休みのラジオ体操と一緒に参加するのもありかなと思います。また、よかったら僕のやっている釧路町こども会の活動に参加していただいてもかまいません。

子どもも大人も、自分を実感できる地域を目指して、子どものため、自分のために、そして地域のためにできることを続けていきたいなと思います。子どもは、よおく、われわれ大人の姿を見えています。自分たち子どものことをこの地域は一員として認識しているのか、仲間として大切に思っているのかを、よおく見えています。

最後に、私の周りにいる若者たちです。高校生とか大学生とか社会人の子もいます。この中には、子どものころからいろんな活動に参加して、大人になってもこのような活動に参加してくれている子がいます。釧路町で生まれ育ち、たくさんの活動を経験している自分は大丈夫、という自己肯定感が下支えしてくれていると感じている若者ばかりです。

この釧路で育ちましたので任せてくださいというのは、将来いろんな場面で、困難な場面があった時に、僕は釧路で育ったのでこれぐらいは大丈夫です、これぐらいは余裕ですといったように、釧路で学び成長した自分に自信が持てる、釧路というのはそういう街なのだということをぜひ目指したいと思っております。

教育委員会に務めている僕が言うのもなんですけど、学力より実力、実力の高い子どもを地域みんなで育み、われわれ大人もどんどん実力をつけて行きたいと思っています。

今後とも釧路町の教育にご理解ご協力いただきますよう、どうぞよろしく願いいたします。私もFacebookなどをやっております。もし、よかったらつながっていただいて、日々の活動を発信させていただいておりますので、ご覧いただければと思います。

本日は貴重な機会、ありがとうございました。終わります。

会長からの謝辞

荒井 剛会長

貴志さん、ありがとうございます。

少年の主張の女子生徒さんの話を朗読していただい

てありがとうございます。タイトルは過去と未来、まさに「バック・トゥ・ザ・フューチャー」ではないかと思ったのですが、中身が本当に、スマホのない時代のことで。私は釧路町に住んでいる者ですから、近くの公園で子どもたちが遊んでいて、大人たちが「うるさいから、なんとかしてくれ」と苦情を学校に言ってくるという話を最近、聞いています。なんて悲しい話なのだと思っていたら、子どもたちもそう感じていたのだなとつくづく思いました。

女子生徒さんが言っていた中で、大人が、自分たちが小さかったころはどうやって遊んでいたの。騒いでいたのではないですか、と。その話はホントにそうだと思います。私よりさらに上の大人は、さらに騒いでいたのではないかと思いますけど。子どもたちにそのような辛い思いをさせてはいけないなと思っております。

貴志さんとは、同じ釧路町ということでいろいろ接点があって、会長あいさつで話しましたが、小学校で見守りをしているのです。今朝もしてきているのです。月に1回、コスプレをしていて、けっこう子どもたちは喜んでおります。4月は新一年生が入りますので来週のどこかで、半ズボンでランドセルを背負って、黄色い帽子をかぶって見守りをする予定です。貴志さんもお越しいただいて、お待ちしておりますので子どもたちも絶対に喜んでくれると思います。貴志さんの周りにいる若い人たちもフェースブックをとおして「あっ、貴志さん頑張っているな」と大人を見て、釧路町の子どもも元気をもらうのではないかと思います。来週、お待ちしておりますので、はい。

本日は、少年の主張もそうでしたが、ホントに心を打つ話がありました。貴重な時間を、ご講演ありがとうございました。

本日のニコニコ献金

■池田 一己君 本日欠席致します。申し訳ありません。

今年度累計 383,420 円